

へんな現実

ヤビと瓶

『大動脈を貫通するミートソース』

お昼。彼女と自宅で仲良くミートソーススパゲティを食べていると、何故か険しい顔になった彼女が突然、こんなことを告げてきた。

「食べ方、汚いね」

「え、ほんとに？ でも家だし、別にいいでしょ」

「まあ、いいけど。だけど気を付けてね。その白いシャツに、ソースがつかないように」

「ふふっ、大丈夫だよ。別についても死ぬわけじゃないしさ」

——グチュ。

「うぐあっ」

橙色の粒が飛び散り、体に激痛が走る。

ミートソースが、大動脈を貫通してしまった……。

『アサガオの観察』

ぼくはタケオ！ 小学三年生！ 夏休みの宿題でアサガオの観察があるのだけど、何分はなびらを描くのが、かったるいんだよなあ……。

「そうだ、いいこと思いついたぞ！」

“ 一日目、種を植えました。 ”

“ 二日目、掘り出されました（知らないおじさんに）。 ”

黒々とした種と、スコップ掘り掘りおじさんの絵を仕上げに描く。よし、宿題終わり！ さっそく先生に提出だ！

「ふざけているの、ですか」

次の瞬間、怒りの形相をした変なおじさんが、観察用紙からニョキッと飛び出してきた。それはぼくの担任の先生だった。驚くことに、先生はスコップ掘り掘りおじさんだったのだ。

『なんかオレ今日、肌の色わりいわ』

「なんかオレ今日、肌の色わりいわ」

友人のユウトくんが、けらけら笑いながら言う。見ると、褐色肌の彼の顔は緑色へと変容していた。なんだかエイリアンのようだ。

「え、色が悪いとかのレベルじゃなくない？ 大丈夫？」

「あはは、だいじょぶだいじょぶ。むしろ今までが茶色すぎたんだよ。思えばようやくここまで来たって感じだ」
何を、言っているのだろうか？ まるで緑色の肌こそ正しく、それまでの状態が間違っていたかのような言い方。普通なら辿り着かないはずの思考。

——まさか。ユウトくんの正体は、エイリアン？

「実は、生まれてすぐに隣の緑川さんを食べた。その効果がやつと出始めたみたいだよ、あは」

かつての隣人の佐藤さんみたいに、ユウトくんが笑う。なあんだ、顔が緑色なのは、緑川さんを食べたからだったのか！ ハハハ阿！

『ギターを入れる』

僕はロック音楽が好物で、将来はミュージシャンになりたいと願っていた。だから幾らか前にエレキギターを購入し、そこからずっと練習を重ねているのだが、一向に上達する兆しが見られない。このままでは埒が明かないので、僕はケツから自分の体内へとギターを入れることにした。

「よいしょ、よいしょ」

仰向けの状態で開脚し、ギターのヘッド先端をケツの穴に当て、体をももぞもぞさせる。僕のギターはストラトキャスタータイプだったので、ヘッドが細長く、以前ゴミ捨て場から拾ってきたレスポールタイプのギターで同じことを試した時よりも、比較的簡単に入れてゆくことができた。

「よいしょ？」

しかし途中で、問題が発生した。骨や腸が邪魔で、上手く体内に入れ切ることができない。困ったな……。

「よいしょ……」

ひょうきんで有名な僕だけれど、思わず落胆の音が漏れてしまう。仕方ないので、邪魔な器官をすべて口から出すことにした。たまたま傍にマジックハンドがあったので、手に取り、口内に突っ込んでガコガコさせる。す

ると、案外簡単に一つずつ運び出すことができた。骨と骨をつなぐ関節や靱帯も、マジックハンドで突くと意外にもあつさりなくなってくれた。

それから、一時間ほど経った頃だろうか、体内に十分なスペースをと思い、邪魔な骨・内臓・筋肉をすべて取り出し切った時には、僕は皮膚だけになっていた。

初め、腕と足はそのまま残しておくつもりだった。だけど実際にそうしてみたら胴体だけが凹んでキモかったので、四肢の中身も急遽取り除くことにした。加えて、途中から何だかマジックハンドで遊ぶのが楽しくなってきた。しまい、首の骨と筋肉も勢いでいつの間にか取り出していた。すると支えを失くした頭が首からちぎれて、結果こんな感じになった。

皮膚だけで中身が空っぽなので、袋に物を詰めるように、当然ギターがするする体内に入ってゆく。内部の構造をなくした僕は、今や人間の形でさえない単なる布のようなものへと変容しており、そんな僕にギター全体が包まれる形態となった。

そして次の瞬間、すごいことが起きた。だらしなくギターの覆っていた僕の皮膚は、どういうわけか、急に元気を取り戻したようにピンと引き伸ばされると、その後すごい速さで収縮し、ギターのボディに体当たりして、バチン、と清々しい音を立ててみせたのである。これに

より、ギターにぴったりくっついたギター状の皮膚ができあがるとともに、世界にひとつだけの人間ギターが完成した。体内にギターを入れるどころか、人類がこれまで到達し得なかった「ギターになる」という夢を、この僕が達成してみせたのだ。

「よいしょ!!!」

ひょうきんで有名な僕だが、これには嬉しさのあまり、思わず「びょうぎん」といった具合の雄叫びをあげてしまう。まあ、頭が取れているので、もはやそれはいくら叫んでも誰にも届かない、声にならない声に過ぎないのですが（笑）。

その後、僕の部屋までやって来た警察によって、僕は回収され、やがて親族のもとへと手渡された。親族は僕をパシヤリと撮影すると、ネットオークションに僕を売り飛ばし、巡り巡って、最終的に僕はとある一人の若者の持ち物となった。彼は貧乏だけれど、ミュージシャンになるという大きな夢を持っていた。それからは彼の情熱に応えられるようでかい音を鳴らすのが、僕の日課である。